

## 新選組旅行記 “楠田 行展”

ボクは自分の理想に一途な人間が好きで、スジに誠実な人間に憧れ、時折迫力のある言葉を口にする人間を素敵だと感じます。ボクはこの種の人間をロマンチストと呼んでいます。過日、会津藩の城下町、福島県会津若松市を旅してきました。幕末のロマンチたちの足跡が数多く残る会津は非常に興味深く、まさに会津魂を感じずにはいられない素晴らしい歴史を持つ町です。

文久2(1862)年12月九代会津藩主、松平容保(かたり:表紙写真参照)は、京の治安維持のため京都守護職として上京してきました。一方、江戸で結成され文久3年2月23日京に到着した新選組の前身、浪士隊は身分保障がなく、その必要を感じた近藤勇以下24名は容保に謁見、会津藩預新選組を拝名し、その後会津と運命を共にしていきます。そして慶応4(1868)年1月3日に薩摩・長州主力の新政府と旧幕臣・会津・桑名主力の旧幕府間で起こる鳥羽伏見戦からの戊辰戦争の折に、東北での激戦地になったのが会津でした。

会津鶴ヶ城には白虎隊士の最期が描かれた錦絵や肖像画なども展示されています。白虎隊は8月22日、戸ノ原で敗北し、翌23日、飯盛山に辿り着きました。そして山頂から火の海と化した城下を見て「城が落ちた」と思い自刃したのです。城と運命を共にすると果てた彼らも誠意を持った少年たちでした。24日戦況の悪さを慮った旧幕臣たちは他藩に救援を請いました。新選組三番組長、斎藤一は「今落城せんとするを見て志を捨て去るは誠の義にあらず」と反駁しグリラ戦を繰り広げ、9月、市の外れ如来堂に支隊10名を率い布陣します。それは容保の恩に報いる一途な行為でした。しかし如来堂は5日に奮戦虚しく潰滅。次ぐ14日城は集中砲火を浴び、遂に22日に城の追手門に降参旗を掲げ、降伏開城となります。降伏調印の際に敷かれた真紅の絨毯は泣血氈(きゅうけつせん)と呼ばれ、藩士は泣く泣くこの氈を切り取り「この日の屈辱は生涯忘れまい」と誓ったといわれています。ボクは展示を見ている途中、会津の意気を感じて何とも言い難い気持ちになり、こみ上げてくるものを堪えるのに必死でした。

ところで如来堂の斎藤はどうなったのか。市内七日町阿弥陀寺には藤田五郎なる人物の墓があります。この人物こそ如来堂で奮戦した斎藤一その人です。彼は窮地を脱し終戦を迎え、後に藩士、高木小十郎の娘、時尾と結婚します。婚礼の仲人を務めたのが主君松平容保で祝辞を述べた容保から藤田五郎の名を与えられました。大正4(1915)年9月28日72歳の生涯を閉じた彼は、今も、最後まで会津と共に生きた忠節の士として祀られています。

旅行を終えて1週間後、会津で高校生による親殺しが起きました。これは会津では殊更あってはならない事件でした。藩校日新館には「ならぬことはならぬ」という教えがあり、白虎隊士も日新館出身。隊士と同じような歳の人間がこの事件を犯したというのは耳を疑う衝撃でした。会津の心象を悪くしたそのガキの罪は甚だ重く、藩士子孫の怒りと失念は想像に難くない。本質的に会津とは時代に左右されない精神を持つ人間の土地であり、その精神に触れたいと思う人間にとって大切な土地なのです。

タクシーの運転手と市内の温泉街の話をした時「栄えている旅館はほとんど東京資本ですよ。会津の人間は商売が下手だからねえ。」と言われたことを思い出します。ボクはこの切なくも含みを持つ言葉を、ロマンチに対する意識だと解釈しています。ロマンチたちの足跡が数多く残る会津若松は非常に興味深く、素晴らしい歴史を持つ町でした。誠

## introducing our crew part.2 “hiyottu”

イベントを始めるようになったのは、大学に入ってから。小学校からの友達や、大学に入ってから友達、色々なことに頑張っていて、私の周りには才能溢れる人が多いな〜と実感してて。

そんな中、私にはコレってもんはなくて、でも、だからといって落ち込むのではなく、私にしかできないことを、やっぺいこうと思ったんです。そこで、周りのステキな人達がせっかく良いものを持っているのだから、もっと色々な人知ってほしい。そして、いい影響を与え合っぺいほしい。そうやって、円(縁)を大事にしていきな、と。

そんな想いから、大学で勉強してたアボリジニの「dreaming」(時間を線上では無く、円上にかんがえること。→祖先から良いものを回り伝えていこうという意。)という言葉を使い、「TRIBAL DREAM」というイベントを始めました。

それから、ジャンルにとらわれない心地良い音楽と、様々な国の民族楽器などのLIVEを入れ、頑張る人達の表現の場になるイベントを、クラブ、高架下の倉庫や、元お風呂屋のカフェなどで、約10回程、自分のペースでオーガナイズさせてもらってます。

このイベントで色々なことを感じながら、たくさんの人達と繋がって、音楽や芸術など頑張っている人達が、癒され、刺激され、元気になって、楽しく情報発信できる場を、できたら大好きな奈良に作りた〜と思っています。

今年の七夕も京都の活力屋で、また10月6〜8日には京都の三条あかり景色というイベントで、三条京阪のKYOUENのイベントをオーガナイズさせてもらう予定です。詳しくは以下のホームページをチェックしてください！

<http://tribaldream.blog60.fc2.com/>

随時UPLしていきますので、よろしく。

## information

next collectiv

次回collectiveは2007年秋を予定しています。  
お楽しみに！

[http://www.geocities.jp/collective\\_web/](http://www.geocities.jp/collective_web/)

パーティやpress collectiveについてのご意見・ご感想をお待ちしています！ 皆でもっと楽しいパーティを作りましょう。  
上記WEBサイトから皆さんの声を聞かせてください！

press collective



## celebrating our 3rd anniversary “kengo” & “yu”

皆さん、いつもcollectiveへのあたたかいサポートをありがとうございます。2007年6月でcollectiveは3周年を迎えます。2003年の秋に自宅でタイガー(星野監督の時代です)VSホークスの日本シリーズを見ていてcollective構想の種を思いつき、メンバーに連絡をし、準備を開始。翌2004年の6月20日に第1回collectiveは開催されました。季節に1回というのんびりペースながら、あれから3年が経ったわけです。当初の構想として、当時の個人的な音楽的関心とも相まって、アメリカの伝説的パーティ“THE LOFT”を参照項としています。(そのあたりについては、[http://www.geocities.jp/collective\\_web/about2.html](http://www.geocities.jp/collective_web/about2.html)をご覧ください)。しかし当時から参照していたのは、音楽としての“THE LOFT”ではなく、コミュニティとしての“THE LOFT”的なものでした。そしてそれは現実の“THE LOFT”ではなく、多分に妄想的なものです。菊地成孔が「妄想のアメリカ、妄想の戦争」をベースにデートコースペンタゴンロイヤルガーデンをコンダクトしてきたように、などと言うとよく言い過ぎでしょうか。この3年間、抜群のセンスと耳を持つ皆さんが、その直感によって、collectiveという、ポジショニングがわかりにくく、極めてイベント性は低いが圧倒的に良質かつ良識あるパーティを選び、足を運び、サポートしてくださったことに、最大級の尊敬と愛と感謝を。過去何度もお伝えしたことなのではないかというも野暮ですが、あなたによってこのパーティは成り立っているという事実は、やはり何度も繰り返したくなるほどに徹然たるロマンチックな事実なのです。それではまた雲州堂のあたたかいグルーヴの中でお会いしましょう。(kengo)

ジーパンを洗うのが好きである。ジーパンを洗うと、この前ジーパンを洗った時から今日までの自分の日常を振り返ることができるような気がする。実家の洗濯機は未だに二槽式であり、水をためて粉石けんを入れ、一度ぐるぐる回したあと、脱水槽に移し入れ、脱水をする。洗いとすすぎでその一連の作業を2回やるわけだ。大抵、僕は洗濯槽を覗き込む。普通なら、洗濯機が動いている間は洗濯機など放っておいて、なにか別のことをすればいい。昨今の全自動洗濯機の普及を見ればなおさらの行動だ。だが、僕はその合理性というか、世間の常識を投げ打ってまで覗き込む。洗濯槽を覗き込み、ジーパンが粉石けんの泡と、脱色で水が青色に変わっていく様を見ているのが楽しいのだ。ただひたすらに洗われていくのを見つめる。こんなになるまで洗ってやらなくて悪かった。ジーパンは元々好きだが、ジーパンの細目を語る知識はない。ただジーパンというものの時を経て、姿を変えていくところが好きだ。だから、ユーズドウォッシュはやっぱりしっくりこない。色落ちと一緒にしていきたい。一緒に老けていきたいものだ。一緒に枯れてこそだ。ジーパンの色落ちを嫌う人もいるようなので、正直このようなことを言っても伝わらないかもしれない。しかし、僕はジーパンを穿きこみ、洗われていく様を見つめ、天日にさらして干しながら、洗う前より色がまた落ちて、パキパキになった瞬間のそのジーパンの表情を想像しながら乾くのを待っていると、古くなっていくこと、枯れていくことに少し明るく前向きになれる気がする。いつもその時はね。ただ、これだけは言っておきたい。僕は生き急ぐつもりは無い。穿きながらジーパンにヤスリをかけたりするようなマネはしない。穿く、穿かれるという至極シンプルなつきあいだ。二槽式のおかげだな。絶対全自動洗濯機の人には伝わらないな。ということは、ほぼこれを読んでくれた人には伝わってないな。まあ、そんなことはどうでもいい。他に書くことがなかったのだから。あ、collectiveが皆さんのおかげで3周年だった。おめでとう。ありがとう。(yu)

## introducing our crew part.1 “mitsuki”

「淡く麗しい奈良の夜」  
最近飲んでばかりなのでお薦めの地元の飲みコースを体験をもとにご紹介します。JR奈良駅から徒歩5分、錆びれたスナック街を少し入ると、電灯の灯らない看板に安Qの文字。いつも決まってこの飲み屋から始めます。名前の通り取り敢えず安い！ 200～300円程度のにぎり5品やもろQ、ゴリゴリ長芋をあてに1杯300円の生でウォーミングアップ。地元の常連が集う飲み屋といった趣向の内装なのですが、よく見るとバレーナの写真や留学生が彼女を募る張り紙、天上から突き出た魚の模型などなど謎のハイブリッド感。ギミックだらけの内装に飛ばされ始めたらアルコールが沁みてきた証拠。恒例行事のように店で流れているテレビに突っ込みを入れ始め、チャンネルを変えられたら、そろそろ引き上げ時の合図です。

かといって遊ぶ場所も無いのでチェーンの飲み屋に流れるのも有りなのですが、敢えてコンビニで淡麗500mlを購入し路上へ繰り出します。千鳥足で三条通り(奈良で最も栄える大通り)を近鉄奈良駅方面の上っていくと、中盤に差し掛かった頃左手に見えてくるフジタホテルが見てきます。深夜でもロビーは開放(?)されており、淡麗片手に世界の名画を堪能するのも通な遊び方なのではないでしょうか。名画に突っ込み飽きたら次の目的地へ。

とは言ったものの目的地などないので、コンビニで淡麗500mlを購入し千鳥足で三条通りを近鉄奈良駅方面の上っていきます。三条通りを登りきると、夕方は黄昏・路上派で賑わう奈良のパワースポット猿沢池が見えてきます。誰も居ない夜の猿沢池も独特の味わい。池周辺のベンチに腰掛、朝までもちろん淡麗で日の出を迎えます。あとは行基の銅像が建つ駅前の噴水広場で立ち飲みコース。だらだらと駅前の看板に突っ込みを入れながらじわじわと最高潮に向かいます。仕事やお肌の調子が気になるときは駅前自販機で甘酒を買ってお開きにするのも良いですが、ここまで来ちゃったら日本酒片手に朝の奈良公園や春日大社がお薦めかも。以上奈良の健全な飲みコースの一例でした。地元でちょこちょこパーティーもやっているのでタイミングが合えば遊びに来てくださいね。今日は楽しみましょう！

### 番外編

「tawakiの淡くの麗しい奈良の夜 part.2」

今回のゲストのmitsukiとhiyottuは共に奈良県民。実はcollectiveのレジデントである楠田行展とtawakiも奈良県民なんです。意外と奈良率の高いこのパーティですが、奈良まで足を運ぶ仲間は多くありません。そこで、ひとつtawakiからも奈良のベストスポットを紹介させていただきます。僕が奈良で最も好きなスペースは宝山寺です。生駒山の中腹に位置するこの寺は24時間オープン。幻想的な夜景もたっぶり楽しめます。「生駒聖天」の愛称で親しまれているこのお寺は、秘仏として知られる歓喜天を祀っています。歓喜天は一般公開されていませんが、象頭人身の男女二体の神が抱き合うエロチックな姿だと言われています。この秘仏にあやかるように、宝山寺界限には昔ながらの連込み宿が立ち並んでいます。幽玄な灯籠が立ち並ぶ宝山寺の門前町はノスタルジックな風情を漂わせています。お金のかけずに旅行気分を味わえる素敵なお場所です。是非！

## 極私的ハウス嘸 “itaru wakui”

「Basement Jaxxの巻」  
暑さと湿度がグッと高まるこの頃ですがみなさまいかがお過ごしでしょうか。今年の夏は猛暑との予報もあるようで暑さを苦手とする身にはなんともしづらい宣告ですが、毎度お馴染みのこの駄文をあなたの一服の清涼、暑気払いとして活用していただければ幸いです。

さてそんなわたくしにも、KOOL&THE GANGのSUMMER MADNESSとかNICK HOLDERのSUMMER DAZEとかスチャダラパーのサマージャム'95とか、夏になると必ず棚から引っ張り出して聴くレコードがいくつかあるのですが、今回はそんななかからBasement JaxxのSUMMER DAZE EPというレコードを紹介してみようかと思います。

ワーナーミュージックジャパンのHPによると、「1994年フィーリックス・バクストンとサイモン・ラトクリフは、フィーリックスが主催した船上パーティーで出会い、意気投合。すぐに自分たちのレーベルAtlantic Jaxxレコーズをスタート。1995年自主制作でリリースした『サンバ・マジック』が全米・全英のクラブで大ブレイク、ハウス・ミュージック界の一番旬なプロダクション・ユニットとして名前が知れ渡ったそうです。

ここに出てくるサンバマジック(samba magic)こそSUMMER DAZE EP収録の夏の定番なのですが、1995年当時という、ちょうどイギリスからいくつかの新しいレーベルやミュージシャン、DJが登場しはじめ、その潮流がNU HOUSEと呼ばれて雑誌でもけっこう取り上げられたりしてちょっとしたブームになってた頃です。そういえばこのレコード、友達に貸しててあやうくそのまま忘れそうになってたのですが、夏が近づいた頃に「あ、貸したままやった」と思い出してすぐに返してもらったことをいまでも思い出します。

そんなことはさておき、Basement Jaxxも最近ではワーナーミュージックジャパンに公式サイトが作られたり、フジロックのトリをとったりして、いまやすっかりメジャーフィールドで活躍しているみたいです。最近のはすっかり聴いておらず、「近頃の曲では…」なんて紹介すら出来ないのですが、とにかくsamba magicをはじめ聴いたときには、黒すぎず、かといって過剰にハねた感じでもない適度に硬い音にアメリカのハウスとは違ったグッド・ヴァイブレーションを感じたものです。それにしてもこんなにもメジャーになるとは、まったく考えつきもしませんでした。

ともあれわたくしにとってこのsamba magicは、気温が上昇始めるとターンテーブルに乗せては夏の訪れをひとしと感じるひとつの風物詩なのです。人それぞれきっと季節ごとにふと聴きたくなってはひそかに聴き入ってしまう曲なんてのがあるのではないのでしょうか。——そろそろ夏の一曲を引っ張り出す頃ですよ。

### 《HP》

[wmg.jp/artist/basementjaxx](http://wmg.jp/artist/basementjaxx)

(ワーナーミュージックジャパン)

[www.basementjaxx.co.uk](http://www.basementjaxx.co.uk)

(公式サイト)

